

## 17

昭和17年開催・第11回日本医学会総会の  
総会講演について

渡部 幹夫

順天堂大学 医療看護学部

第11回日本医学会は、東京にて昭和17年3月26日から30日まで5日間開催された。昭和19年6月に『第十一回日本医学会会誌(其ノ一)』が発行されているが(其ノ二)が無いため学会記録としては完全なものがない。会頭の長與又郎を前年6月に失い、宮川米次副会頭が代行を勤めて開催された。参加者は約6000名と昭和13年4月京都における第10回(5400名参加)と昭和22年4月大阪での第12回(1500名参加)の間の太平洋戦争中の医学会総会として歴史的な検証の価値のある大会と考える。(其ノ一)に収録されている総会講演は次の九演題である。

山崎佐『日本医道と医学及外教(仏教, 儒教, 基教)との関係』, 細谷省吾『病原細菌の菌体外毒素』, 内村祐之『精神分裂病(早発性痴呆)の発生と病態』, 下田光造『精神分裂病の病理解剖 附 治療成績』, 伊吹月雄『今次事変に於ける陸軍の戦病就中マラリアに就いて』, 岡治道『結核症の病理と臨床との交渉(特にX線読影の基礎に就て)』, 暉峻義等『産業と結核』, 遠藤繁清『拓殖青少年の結核』, 今村荒男『結核の疫学的観察及予防』。

結核について四演題と精神分裂病について二演題であることが注目される。平成11年に第25回日本医学会総会記録委員会により発行された『日本医学会総会百年のあゆみ』においても、資料の少ないことにより、記載の少ないものとなっている。戦時体制下の開催でありながら参加者数は多くを数えたが、陸軍や海軍の軍医の参加が極めて少ないことと、医学用語の整理・統一、外来語を使用せずに日本語化の完了にちかづいたことを記録している。第10回大会が『戦時体制下医学講演会』を前面にしていることと比べると、太平洋戦争開戦後の昭和17年3月は戦線の拡張に伴い軍医学校の研究者たちは学会どころではなくなったとまとめている。ちなみに医師数の推移は昭和13年62934, 17年50679, 19年11135, 22年70636である。残された総会講演を見直し、興味あるいくつかについて報告したい。

山崎佐は、医学の方技の進歩にかかわらず、医道は甚だしく廃頽して今日に至ったとして、新たに制定された国民医療法の実現に期待している。山崎の講演時の理想としているものは仏教の影響を受けた古医道と儒教と結びついた新医道であり、近世以降の洋医術の導入においては、切支丹の宗教精神にふれることを恐れ、方技のみを学んだと批判的である。明治初期の政治において医制をうたいながら、昨今の医道は頽廃してしまっただとしている。国家の医師に期待するものが窺い知れないものとなっているとしている。明治・大正・昭和の医のあり方には肯定的な言説が見られない。

伊吹月雄は中国大陸の戦線に於いてマラリアが熾列をきわめ、大東亜共栄圏の確立のためには蘭印のマラリア剤の独占を覆すことが必要であるとして、南方は我国衛生上の一生命線なりとしている。

岡治道は昭和2年以降の東京市療養所での肺結核の臨床と剖検との比較として得られたX線像の解析を108枚の幻灯板にて行ったようであるが、挿図は残念ながら会誌では省略されている。また、いわゆる断面撮影、断層撮影は解剖学的には限層撮影とよぶべきであるとしている。結語として医学教育における病理解剖学を形態学として充実する必要性を強調している。

暉峻義等は、昭和5年前後にわが産業を席卷した経済恐慌、これにつづく産業合理化の進行、全体的な産業の不振はかえって労働の合理化、機械化を増進し社会政策の進行とあいまって、一般的には労働負担の軽減傾向を誘致し結核の蔓延はその勢力をそがれるごとく見られた(この時代に於ける結核死亡率の減少を考えよ)としている。

太平洋戦争開戦後の昭和17年開催された医学会総会の会誌が19年に発刊されていることを考慮すると、それぞれの掲載論文がそのまま口演されたとは考えられないが、大陸での戦争が長期化し第二次世界大戦となる中での国民医療における問題意識が良くわかる。